

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 畦地優作 所属： 羽曳野支援学校 記録日：2020 年 2 月 10 日
キーワード： 自己管理、遠隔教育

【対象児の情報】

・学年

訪問教育対象児 小学 6 年生の男児

全身にアトピーの症状が出てかきむしり、夜寝られないことが多くなった為入院。小児病棟で幼児等と同室で過ごしており、同世代の子どもと接することは無いが、看護師や教員と気兼ねなく会話をすることができており、自分から話題を提供する等会話が好きである。掃除や洗濯は自分で行う必要があり、地域校や母からの課題も取り組んでいる。授業以外の時はゲームや課題、散歩等をして過ごしている。

・障害名

■病弱、アトピー性皮膚炎

【羽曳野支援学校と訪問教育の情報】

大阪府立羽曳野支援学校は、大阪府にある病弱の支援学校である。大阪はびきの医療センターに隣接している本校のほかに 6 か所の病院（大阪労災病院・堺咲花病院・大阪急性期総合医療センター・大阪母子医療センター・近畿大学病院・阪南病院）の中に分教室がある。全ての分教室で授業開始時間や授業時間、学習環境が違う。他には、院内学級の無い病院や退院後自宅療養中の児童生徒宅へ訪問する訪問教育も行っている。訪問教育では 1 日 1 ～ 2 教科で 2 時間の授業を週 3 日 1 対 1 で行っている為、院内学級のある分教室に比べ授業時間が少なく子どもと接する機会も少ない。本校では過去に遠隔教育を行った事は数回しか無く、あまり前例が無い。また、全校で交流する機会は少ない。

・障害と困難の内容

①日常生活でのセルフメンテナンスが必要。

②訪問教育を受けているため、常に児童と教員の 1 対 1 での関わりで孤独感がある。

【活動目的】

・当初のねらい

①自分の病気への理解や現状を把握し、すべき事を確認し、セルフメンテナンスを行い、症状を軽減することで病気のストレスを減らし、心理的な安定を図る。

②羽曳野支援学校内の児童生徒とテレビ電話等で交流を行い、自分以外にも病気と向き合い学習している仲間がいる事を知り、テレビ電話を楽しみ、入院生活のモチベーションを高める事で、心理的に安定する。

・実施期間

2019 年 9 月 2 日から 2019 年 10 月 1 日まで

・実施者

①畦地優作②訪問教育部教員③本校教員

・実施者と対象児の関係

①訪問教育部と本校、訪問教育部と大阪急性期総合医療センター分教室で遠隔教育時に関わっている。本児と各分教室の児童生徒の交流の実施計画及び実施に携わった。また、校外学習時の支援も担当している。

②担任、授業者、訪問教育部 ICT 担当者

③校外学習の事前指導者、校外学習の全体引率及び支援教員

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

体調面

かゆみや痛みの症状が出て、夜寝られないことがあった。

生活面

自分で目覚ましをかけ起床し、母が組んだスケジュールをもとに行動することを目標にしていた。また、運動が苦手な為、朝のランニングをスケジュールに入れていた。

コミュニケーション面

社交的であり様々な友だちと関わっているようであるが、特定の友だちと仲良くする様子は無かった。

学習面

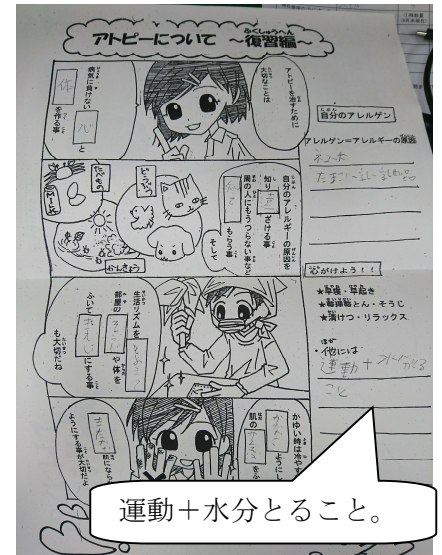
普通学級で学習している。寝不足の為、集中して授業が受けられずに寝ることが多かったため、授業で行った課題や同じ単元の問題集の未記入箇所が多い。基礎的な学力に問題は無いが、文字を書くこと、繰り返し同じ事をするのが苦手である。

図 1

・活動の具体的内容

自分の病気の理解

アトピー性皮膚炎の症状がある子どもは、かゆみの為身体を掻くことが多い。掻く事で皮膚が傷つき、またかゆみの症状が増すなど、掻いたら皮膚にとって良くないことがわかっている子どもが多いが、皮膚の状態がどのように悪化していくのかを理解している子どもは少ない。また、汗をかいた服はそのままにせず洗濯して清潔にし、身体に必要な水分量を摂取する必要がある。適度な運動や規則正しい生活をする事、ストレスを減らすことで症状が軽減されやすい。症状が軽減すればかゆみもそれに伴って減少する。専門的な知識が無くても、この行動にどんな意味があるかを理解した上で、日常的に気をつける事が出来れば症状の悪化を防ぐことができる。よって子どもが病気を理解するための学習をする事が入院生活を過ごす上で重要な事になってくるので、自分の病気の理解を図る取り組みを行った。



本校では業間自立活動の時間に右の図1や図2のようなワークシートを利用して病気の理解に役立てている。今回はこのワークシートを使って学習したが、未学習分野が多く、課題も多かったため、実施期間中には2枚しか取り組むことができなかった。

自分の現状把握とすべき事の確認

入院生活においては、自分ですべき事が多くある。まず、日常生活を整えるために必要なこと(①自分で掃除や洗濯をする。②適度な運動を行う。③水分補給をする)、そして、地域校と保護者からの課題に取り組むことである。その為、すべき事を一覧に書き出し入院生活の過ごし方を考えるようにしていった。そこで、iPadの「XMind」というマインドマップアプリを活用し、自分に必要なすべき事は何かを確認できるよう日常生活とそれ以外のことに分けられる

せんたくする。

図 2

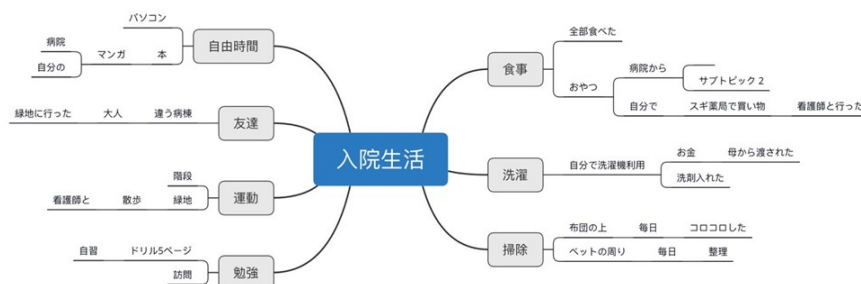


ゆびのはらでかく。
つめをきる。

運動する。
ちやを飲む。

ように教員が「自由時間・友達・運動・勉強・食事・洗濯・掃除」の項目を事前に設定して整理できるようにした。このアプリは、言葉だけでなく視覚的に捉えて整理できる点が利点である。教員が設定した項目の質問に一つずつ応えて自分の現状と課題を教員と確認した。分岐や枝が増えてくると興味深く iPad を見ていた。

また児童はスケジュールが無いとすべき事ができなかったため、家庭では母が作ったスケジュールに基づいて生活をしていた。その為、入院中も自分で考えたスケジュール表（訪問授業がある日と無い日の2種類）を病室に貼って入院生活を過ごした。



オープンソースのマインドマッピングソフトウェアで windows、mac、linux 等の複数の OS に対応している。

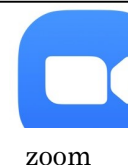
「マインドマップ」・・・頭の中で考えていることを脳内に近い形に描き出すことで、記憶の整理や発想をしやすいもの。



羽曳野支援の仲間がいることを知り、交流する

下に列記する取り組みを通して治療へのモチベーションを高めることを行った。すなわち、テレビ電話を行うことで自分以外にも同じ羽曳野支援学校で入院中に頑張っている仲間がいることを知ること、羽曳野支援学校全校の行事である校外学習前に交流したりする事により安心して校外学習に参加すること、遠隔による人とのコミュニケーションをとったり、教科学習以外の取り組みによる学習意欲の向上を図ったりすることで、孤独感の解消や訪問教育を受ける楽しさを増すことである。

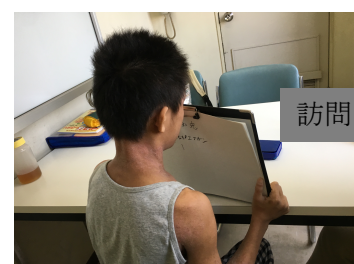
遠隔交流テレビ電話は iPad の「zoom」というテレビ会議ソフトを使って行った。このアプリはアカウントを1つ登録するだけでその他の人はアプリのインストールを行うだけで良い。複数の人がアカウント登録の手間が無いのが利点である。



校外学習に向けた取り組み

(1) 9月10日 校外学習前に本校の6年生との交流

児童との交流の前に本校教員（実践者）と初めての交流を行った。相手の顔が画面に映るととても驚き、訪問教育部教員以外との初めての交流でとても緊張していたが入院生活についての質問に応えることができた。その後、本校、訪問教育部お互いの授業時間を合わせて子ども同士の交流を行った。初めての児童とのテレビ電話では緊張しており画面に映る事を恥ずかしがっていたが、自己紹介で名前や好きな事を言ったりお互いの病棟での過ごし方について話をしたりした。また、教員の出したクイズにホワイトボードで解答を書き、他の児童の回答に興味を示したり自分の解答を伝えたりすることにより、楽しく参加でき笑顔がたくさん見られた。



(2) 9月13日 本校との校外学習の合同事前学習交流

機器の接続時に本校の教員と簡単に交流をし、その後普段授業に來ている訪問教育部教員とも交流を行った。その時に宿題の進捗状況を聞かれとても驚いていた。従来は訪問教育部教員が授業中に事前指導を行っていたが、機器を利用し、本校の事前学習の時間に合わせることで、一緒に事前学習にテレビ電話で参加することができた。この時は2回目かつ、校外学習に関する簡単なクイズに答える、事前学習を見る、ということもあってあまり緊張が見られなかった。交流時に本校の騒いでいる子どもたちの様子を見て原籍校の教室の騒がしさと比較し、「賑やかだなー」言葉にする姿が見られた。



(3) 9月20日 校外学習

羽曳野支援学校全ての分教室が一斉に行う行事で今年度は訪問教育部、本校、大阪急性期総合医療センター分教室、近畿大学病院分教室が同じバスに乗車して、大阪市立科学館へ行った。往路のバス内では担任としりとりをしたり、本校の児童と一緒にふざけあったり、各分教室からのクイズに参加して楽しく過ごせた。クイズでは1回目に問題を読むときは恥ずかしくてあまり声が出なかったが、内容が皆に好評で盛り上がった為、2回目からは自信がつき大きな声で問題を読み上げることができた。また、昼食は一人ではなくバス内で皆と同じ環境で食べる事ができた。現地では校外学習の事前指導をした教員や本校教員等に自分から話しかけ、いろいろな人と関わることができた。



羽曳野支援学校内の分教室交流会

(4) 9月24日 急性期総合医療センター分教室との交流

お互いの授業時間を合わせて交流を行った。お互いが3人チームを組んで同時に話した事を当てるというゲームを行った。訪問教育部は教員を含めて3人でチームを作った。事前に教員と共に何を話すか考える時間や、実際に相手が何を話したか考える時間はとても楽しむことができた。自分の話す番で、同じチームの教員が話すタイミングがずれると、悔しがると真剣に取り組む様子が見られた。今までは自分一人でテレビ電話の相手と会話をしていたが、教員とのチームということでiPadに近づいて画面に映る事を臆することなく、とても意欲的に参加することができていた。



・対象児の事後の変化

自分の病気の理解

ワークシートは、2枚しか取り組めなかったため皮膚の詳しい状態についての説明はできなかったが、基礎的な自分の病状についてはよく理解しており、スラスラと記述することができていた。取り組み中、自分には犬や猫アレルギーがあること、アレルギーは人には感染しないことをしっかりと原籍校のクラスメイトに伝えていると話していた。退院後にも、規則正しい生活と適度な運動、水分補給が必要なことを教員と一緒に再確認する事ができた。それらは授業が始まる前後の時間や掃除の時間等に教員からの声かけを受けたり、学習部屋まで一緒に階段を使ったりして身体を動かすことで習慣化することができた。取り組んだワークシートを母に見せると、母は喜んでおり児童と一緒に気をつけるべき点を話し合っていた。

自分の現状を把握とすべき事の確認

用意したフォーマットや促しが十分でなかったため、入院時・入院中・退院前の子どもの気持ちの変化を調べる事ができなかった。もっと、どうすれば苦手な洗濯や掃除等の身の回りの事をすることができるのかについて考え、改善する機会をつくる事で退院後の生活につなげることができればよかったと思われる。

羽曳野支援の仲間がいることを知り、交流する

- (1)校外学習前の交流では初めてのテレビ電話が楽しかったようで、「またやりたい」と言っていた。以後、テレビ電話をするとわかるとその日の学習を集中して行うようになり、学習意欲や訪問教育への期待感を高めることができた。
- (2)当日校外学習で引率する教員の把握、自分以外の参加児童を見る事により校外学習への実感がわき、大阪市立科学館のしおりの行きたい所に印をつけたり、話したりするなど期待する姿が見られた。
- (3)事前にテレビ電話で本校6年生の児童や教員と交流していたこともあり、当日は安心してバスの中のレクリエーションや大阪市立科学館を楽しむことができた。直接会うのは初めての教員にも、テレビ電話で話したことがあったため、握手や話しをすることができた。
- (4)部署間交流時、大阪急性期総合医療センター分教室から校外学習に参加していた生徒が参加していたことを知り、校外学習だけの関わりではないことが理解できていた。また、感想には次回は絵を見せ合って別のゲームをしたいと書く等今後の取り組みを楽しみにする期待感が見られた。授業の開始前より楽しみにしていたテレビ電話が終わった後も、意欲的に学習に取り組むことができた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

- ①皮膚の状態が良くなったことにより、ストレスが軽減され、セルフメンテナンスができたのではないかな
- ②仲間との交流により治療へのモチベーションが上がったのではないかな

・エビデンス

①セルフメンテナンスに関すること

スケジュールを意識しすぎて、達成できないことでストレスがかかっている可能性があると言われ主治医より助言があった。そのため、1日のスケジュール管理に関しては必ず達成するのではなく、意識づけ程度にして日々を過ごせるように課題の量を減らした。「取り組めた事に対して」褒めるようにすることで、本人の「入院生活が楽しい」、保護者からの「のびのび過ごせている」等の発言があった。また、病気に関する事や自分がすべき事を理解することで、日常的に水分補給を進んで行うことや、階段昇降や公園への散歩等の運動をして規則正しい生活をする事ができていたことが、主治医や保護者との話し合いよりわかった。見てわかるほどに皮膚の状態が、入院時に比べて良くなったことから、入院生活を楽しみストレスを軽減できたのではないかと考えられる。

②他者との交流

他の分教室とテレビ電話での交流後、振り返りシートを用いて児童の感想を聞いた。1回目の本校6年生との交流後には、「大勢でやりたい。緊張したがもう一回したい」と書き、自分が一人、相手が二人で寂しかったがまた関わりたいと肯定的な意見が出た。2回目の本校との校外学習の合同事前学習ではしっかり話しが聞け、「科学館で実験をたくさんしたい」と楽しみにしている意見がでた。3回目はテレビ電話での交流では無いが、校外学習実施後にも感想を聞くと簡易ではあるが「楽しかった」という意見が出た。校外学習当日はバス内や現地で本校の児童や教員と気兼ねなく話したり、自分から握手等したりすることができた。また、テレビ電話

をしていない教員とも自分から関わることができた。4回目の急性期総合医療センター分教室との交流後には、「次は絵を見せ合うことがしたい」と具体的に何がしたいかを言うことができた。

児童は字を書くことが苦手で、ひらがなで書いたり、簡素な感想を書いたりすることがあったが、しっかりと何がしたいか考え、「大勢で行いたい」「お互いの絵を見せ合いたい」と感想を書き、訪問時の1対1の授業と違い、子ども同士の複数の関わり合いを求めていることがわかった。また、普段は書くことが嫌いな漢字を使うことができており丁寧に感想を書いたことがわかる。母は漢字を使って自分の考えを書いた感想を見て喜んでいて。

・その他エピソード

退院後の様子を保護者に確認すると、朝のスケジュールにあるランニングはできなかったとしても正直に母に言い、また明日頑張るという前向きな気持ちで日々取り組んでいる。学校での課題もこなすことができおり、水分補給もしっかりできているようである。

(2)共同事前学習後

科学実験をできるだけしたい。

(4)急性期総合医療センター

分教室交流後

絵をみせあうのをしたい。

(1)本校交流後

大ぜいでやりたい。

次回に向けての期待や希望

るたいけしたい

全体的な感想

たいたい分かります

した

(4)急性期総合医療センター

分教室交流後

まあまあよかった。

(2)共同事前学習後

だいたい分かりました。